

工業化以前の大牟田の歴史

三池炭鉱の所在地であり、1800年代から1900年代にかけて日本の工業化を支えた石炭の供給地としての大牟田の重要性は、それ以前の歴史の多くを覆い隠してしまっている。

古墳時代（約250～552頃）、人々は有明海を見下ろす大牟田の山々に古墳を築いていた。中でも有名なものは、萩ノ尾古墳、潜塚古墳、黒崎観世音塚古墳である

大牟田について最初に言及されたのは、日本史上2番目に古い文献である『日本書紀』（720年）である。それによると、伝説上の景行天皇（紀元前13年～130年）が大牟田を訪れ、この地域を「神木の地」を意味する「御木国」と名付けたという。

平安時代初期（794年～1185年）には、三池氏が大牟田地方の支配者として台頭した。彼らは820年に普光寺を建立したとされている。彼らの影響力は非常に大きく、大牟田地域は「三池」と呼ばれるようになった。平安時代末期には、大牟田の三池典太光世（生没年不詳）が作った刀は全国的に有名になった。

この地域で石炭が最初に発見されたのは1469年のことだった。地元の農民、伝治左衛門とその妻が、薪を集めるために稲荷山に登った。夕食の火を起こした後、その下の黒い石も燃え

始めたのを見て彼らは驚いた。この発見を記念して建てられた焼石山公園は、大牟田で今でも石炭が地表に見られる数少ない場所のひとつである。

1621年、大牟田地域は立花種次（1604～1630）を藩主とする三池藩領となった。種次とその子孫は、山麓にある現在の新大牟田駅より南に位置する三池の町に住んでいた。

1630年代、長い干ばつがこの地域の収穫に深刻な影響を与えたため、立花家は灌漑用のため池と早鐘眼鏡橋を建設し、安定した水の供給を確保した。水神を鎮め疫病を防ぐために、大蛇山祭りの前身となる祭りが同じ頃に始まったと考えられている。また、近くの山神社で行われる銭太鼓踊りとひゅうたん廻しの祭りは、江戸時代（1603年～1867年）に五穀豊穡に感謝し、雨乞いをするために始まったと考えられている。

1806年、立花家は現在の福島県に転封となり、三池藩は徳川幕府領となった。その後三池藩の北部は柳河藩に転封となった。残りの三池藩領地は1851年に立花家に返還され、1871年の廃藩置県まで立花種恭（1836～1905）が治めた。種恭は石炭の採掘を強化し、明治期（1868～1912）の三池炭鉱の工業化の基礎を築いた。